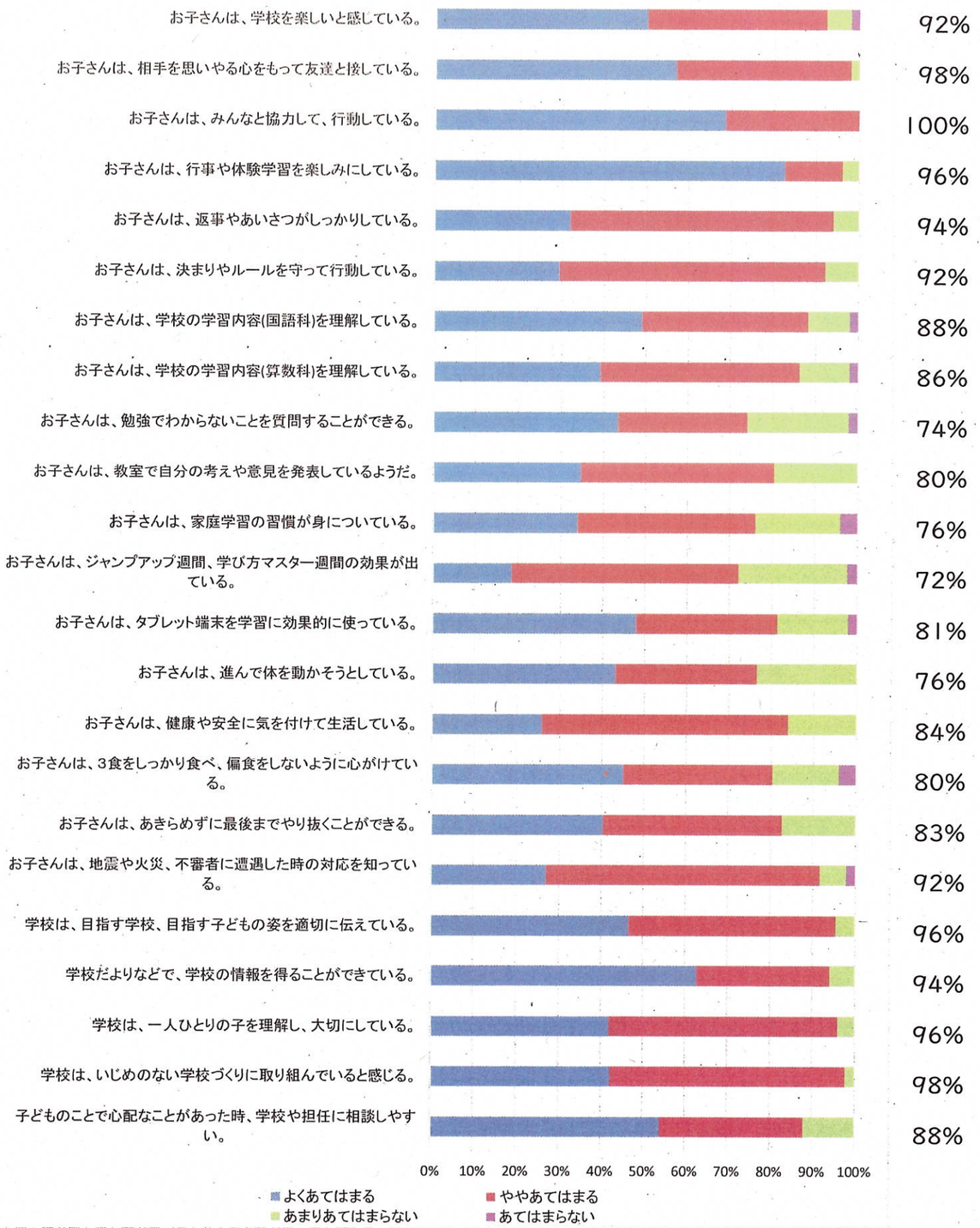
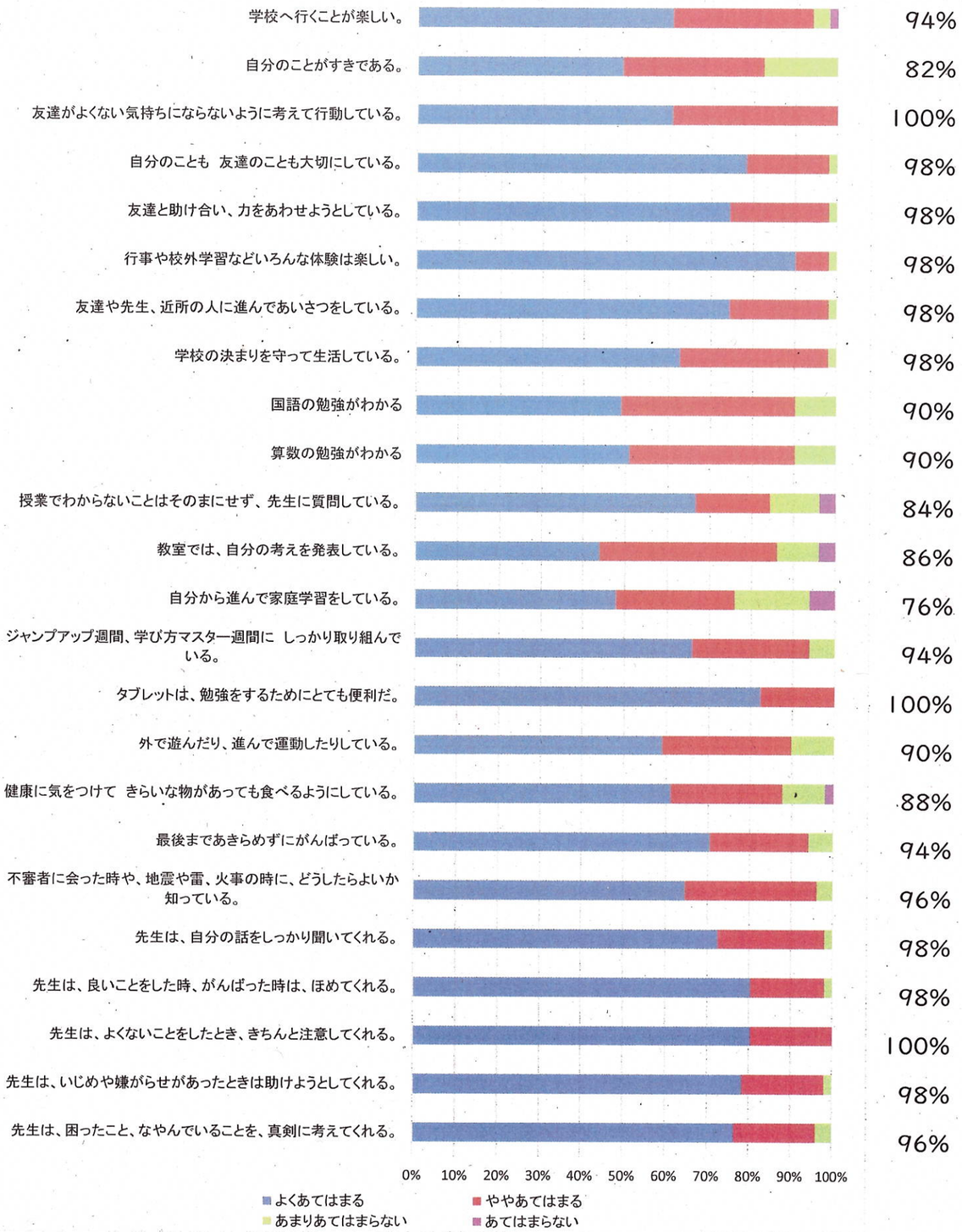
学校評価　2024.12（保護者）



学校評価　2024.12（児童）



（様式１）

令和6年度　学校評価自己評価報告書および学校関係者評価報告書

高島市立マキノ南小学校

学校教育目標	「笑顔あふれ　つながり やり遂げる　南小の子ども」 〈めざす子ども像〉 ○自分を表現する子　○学び合う子　○挑戦する子 〈めざす学校像〉 ○明るく元気な学校　○温かく楽しい学校　○進んでよく学ぶ学校 〈めざす教師像〉 ○明るく笑顔あふれる教師　○地域とともに歩む教師　○学び続け、高まる教師

昨年度の評価概要	○地域の方との良好な関係づくりの成果もあって、学校地域連携カリキュラムをうまく進めることができていた。南小の地域資源を生かした田屋城登山は、南小ならではの取組で、地域の方の参加もあってよかった。 ○小規模校のよさを生かし、自然環境も生かした体験活動を取り入れ、おおらかで、やさしく、たくましいマキノの子の育成を期待する。 ○子ども同士で成長していく部分が多い。少人数であるのでどうしても大人の手が入りやすくなるが、サポートする部分と子どもに任せる部分を意識して教育活動に取り組む必要がある。 ○学校の役割は「学力」「コミュニケーション力」を高めることとし、家庭や地域の役割は「善悪の判断」「基本的な生活習慣」「社会生活に必要な常識」を身につけることと分担できればよい。家庭があっての学校である。学校と地域との更なる連携を期待する。 ○学級数減に伴う職員数減を見据えて、限られたメンバーでできることを再検討し、何かを増やすなら、他を減らすなど、働き改革を意識しながら業務を精選する。先生が笑顔で教壇に立つことが一番である。

中期的目標	○学校地域連携カリキュラムの確実な遂行 ○家庭での自主学習の定着 ○いじめ、不登校、体罰のない安全・安心な学校づくり ○教職員の授業力、課題対応力の向上

評価項目（指導力点）	指標：到達目標（成果指標・取組指標）	達成状況	評定		改善方策	学校関係者評価
笑顔あふれ(心アップ) ○道徳・人権教育の充実 ・考え、議論する道徳科の授業づくり ・多様な経験を積み重ね、まわりを思いやる心を育成 ○いじめのない学校づくり ・チームで取り組む生徒指導と、早期発見、迅速な初期対応の徹底 ・自分も友達も大切にできる人間関係の基盤づくり ○キャリア教育の推進 ・自己肯定感を育み、安心して挑戦できる環境づくり ・多様な人と交流のある活動の充実 ○特別支援教育の推進 ・教育のユニバーサルデザイン化 ・個が受け入れられる指導 ○凡事徹底の学校風土の構築 ・当たり前のことを当たり前に ・気持ちのよい挨拶・返事、時間厳守、身の回りの整理整頓・掃除	道徳・人権教育の充実 ※友達や相手を思いやる心が育つ(児童・保護者評価)90%以上 ※考え、議論する道徳教育を推進(教職員評価) 90%以上	※「友達がよくない気持ちにならないように考えて行動している」(●児童100%)・相手を思いやる心で友達と接する」(●保護者98%) ※「考え、議論する道徳教育を推進しようとしている」(▲教職員63%)	B	A	「考え、議論する道徳」は、研究指定時と比較して低下、互いに授業を見る・語る場を設け、今後も全員参加型の授業を構築していく。	○全員参加の笑顔あふれる授業風景から先生と子どもの関係の良さを感じる。今後も子どもの本音を出させる雰囲気づくりに努めてほしい。 ○「すて木」の継続やその紹介の工夫により、支持的風土が作られ、自尊感情の高まりが評価結果にも表れている。持続に期待する。 ○登下校時に上学年児童が下学年児童に見せる思いやりを感じ、地域の人々にもしっかりとあいさつができている。地域住民も小学生に好感を持っている。
	いじめのない学校づくり ※学校が楽しい(児童・保護者評価) 90%以上 ※いじめの防止・早期発見・チームで迅速対応(教職員評価) 90%以上	※「学校へ行くことが楽しいと感じる」(●児童94%・●保護者92%) ※「先生は、いじめや嫌がらせがあったときは助けようとしてくれる」(●児童98%)「学校は、いじめのない学校づくりに取り組んでいると感じる」(●保護者98%)「いじめのない学校づくりに努めるとともに、早期対応・組織対応ができている」(●教職員100%)	A		毎週定例の情報共有では、子どもの心配な面だけでなく、称賛すべき行動も紹介し合い、褒める・認める場を創出する。	
	個の自立とキャリア教育の推進 ※自己肯定感「今の自分が好きだ」(児童評価) 90%以上 ※係・委員会等で工夫した特別活動を推進(教職員評価) 90%以上	※「自分のことがすきである」(▲児童82%) ※「みんなで協力して何かをやり遂げる等、集団としての力を高める取組を行っている」(●教職員100%)	B		児童評価は数年間にわたり向上傾向にある。「すて木」の取組を継続し、学年を超えた認め合い、その紹介の場を拡げていく。	
	個に配慮した特別支援教育の推進 ※個を大切にした取組推進(児童・保護者評価) 90%以上 ※一人ひとりの個性を大切にした取組推進(教職員評価) 90%以上	※「先生は、自分の話をしっかり聞いてくれる」(●児童98%)・「学校は、一人ひとりの子を理解し、大切にしている」(●保護者96%) ※「子ども一人ひとりの個性を理解し、適切に指導・支援している」(▲教職員88%)	A		教科担任制による授業など、担任外教員が見た児童の様子をより多く情報共有に努め、個性を伸ばせる環境をつくる。	
	凡事徹底の学校風土の構築 ※しっかりあいさつができる(児童・保護者評価) 90%以上 ※学校のきまりを守る(児童・保護者評価) 90%以上	※「友達や先生、近所の人に進んであいさつをしている」(●児童98%)・「お子さんは、返事やあいさつがしっかりしている」(●保護者94%) ※「学校の決まりを守って生活している」(●児童98%)・「お子さんは、決まりやルールを守って行動している」(●保護者92%)	A		少人数がゆえに馴れ馴れしくなってしまうが、学習中は「○○さん」と友達のことを表現するなど、時と場に応じた言葉遣い・礼儀が身につくよう日常的な指導に努める。	
学び深く(学力アップ) ●『協働的な学び』の実現 ○全員参加の授業づくり ・熟力ある学習課題・導入・発問の工夫等の教師のしかけ ・考えを広げ、深めるための対話 ・ペアやグループでの言語活動の充実・異学年交流学習 ・児童同士、教師や地域の大人とつながる授業の創造 ○園・中との連携 ・小中一貫教育の深化　・園小連携の継続と推進 ●『個別最適な学び』の実現 ○タブレット端末の効果的な活用 ・主体的に学ぶ態度の育成 ○基礎基本の定着 ・個に応じたきめ細やかな指導　・自分を表現する取組 ○学習習慣の確立 ・学習規律、学習習慣の確立・授業とつながる家庭学習	授業改善・授業への参加意欲 ※授業の理解度・満足度(児童・保護者評価) 90%以上 ※指導改善・全員参加の授業推進(教職員評価) 90%以上	※「教室では、自分の考えを発表している」(▲児童86%)・「お子さんは、教室で自分の考えや意見を発表しているようだ」(▲保護者80%) ※「授業改善を工夫し、全員参加の授業を心がけている」(▲教職員75%)	B	B	発表にこだわらずにグループ交流やタブレットの発信など、児童・保護者と「発表」の視点を共有し、年度当初に共有した姿に近づいたか検証する場を創出する。	○文章に親しませる手立てが必要である。図書館との連携による貸出に興味を持っていることから、学校でも家庭でも本に親しめる場づくりを進めることが有効である。評価項目にも読書に関する項目を付加する。 ○家庭学習は、家庭の力が大きいが、学校の取組として知的好奇心をくすぐるような家庭学習の開発など、工夫が必要である。 ○タブレットを使うことが目的化していた状態を脱し必要に迫られて利用している様子が見られる。主体的に利便性を感じるような活用法を継続してほしい。
	学力の定着 ※学習内容を理解している児童(児童・保護者・教職員評価)80%以上 ※全国学力学習状況調査の無回答率　5%未満	※「国語を理解している」(●児童90%・●保護者88%・●教職員100%) 「算数を理解している」(●児童90%・●保護者86%・●教職員88%) ※全国学力学習状況調査の無回答率は、●0%(全ての問いになんらかの回答をしている)	A		個別最適な学びができる場を整える。5年生が教育研究所と連携して取り組んだ「単元自由進度学習」等の良さを取り入れた学びの場の工夫にチャレンジする。	
	学習習慣の確立 ※進んで家庭学習をしている(児童・保護者評価) 90%以上 ※ジャンプアップ・学び方マスターの取組(児童・保護者評価)90%以上	※「進んで家庭学習をしている」(▲児童76%)・「お子さんは、家庭学習の習慣が身についている」(▲保護者76%) ※「ジャンプアップ週間・学び方マスターにしっかり取り組んでいる」(●児童94%)・「お子さんは、ジャンプアップ週間、学び方マスター週間の効果が出ている」(▲保護者72%)	C		与えられる学習から、自分で考えて設定する学習へ、学年に応じた自主学習例を提示するなど、家庭学習の取り組み方にも変化を加えていく。	
	主体的に学ぶ力の向上 ※「聞く・話す・自分を表現する」学習に心がける(教職員評価)90%以上 ※タブレット型端末を効果的に使っている(児童・保護者評価) 90%以上	※「進んで話す・聞く・自分を表現する授業を心がけている」(▲教職員78%) ※「タブレットは、勉強をするためにとても便利だ」(●児童100%)・「お子さんは、タブレット型端末を学習に効果的に使っている」(▲保護者81%)「児童は約束を守って学年に応じてタブレット端末を使いこなしている。」(●教職員100%)	B		年度当初の校内研究会において「めざす授業像」を確認し、どの子もが反応して授業に参加できる授業のために有効となるタブレットの利用を推進する。	
健やかに(元気アップ) ○運動に親しむ環境づくり 健康な体づくり ・有益な運動との出合い・魅力ある体育の授業 ・基本的な生活習慣(早寝・早起き・朝ごはん) ・体力向上への意識づけ　・たてわり遊び ・健康教育　・家庭と連携した食育活動 ○防災・防犯への危機意識の保持 ・安全教育の充実　・自分の命を守る意識向上 ・有事の判断力、行動力の育成 ○やり切る姿勢づくり ・がんばりや努力を認め合う雰囲気づくり ・チャレンジする環境・ねばり強く取り組む態度	運動好きの児童の育成 ※進んで運動、あきらめずにやり遂げる(児童・保護者評価) 90%以上 ※体力向上に向けた体育科・外遊びの実践(教職員評価) 90%以上	※「外で遊んだり、進んで運動したりしている」(●児童90%)「お子さんは、進んで体を動かそうとしている」(▲保護者76%)「最後まであきらめずにがんばっている」(●児童94%)「お子さんは、あきらめずに最後までやり抜くことができる」(▲保護者83%) ※「体力の向上のための適切な指導、取組をしている」(●教職員100%)	B	B	昼休み等に「あそびのひろば」を開設、中学年が先導して企画し、学年を超えて体を動かす場を設ける。体育の宿題を定期的に取り入れる。	○学校では運動をするが、家庭では運動しないという実態が見られる。以前に外遊びをしていた時間を、現代ではどのように使っているのか検証する必要もある。 ○達成感を感じるようなステップ型の運動の学習が有効である。運動会の種目に一輪車を選べるなど、ブームによる運動への興味の高まりに期待したい。 ○防災を学ぶなかで非常時に生き延びる力をつける取組を生み出したい。（飲料水を確保する・火を起こすなど）
	食育等健康教育の推進 ※食育の充実(児童・保護者評価) 90%以上 ※給食指導や健康に関する適切な指導(教職員評価) 90%以上	※「健康に気をつけて　きらいな物があっても食べるようにしている」(▲児童88%)「お子さんは、３食をしっかり食べ、偏食をしないように心がけている」(▲保護者80%) ※「各教科や給食の時間を利用して、健康の保持増進や食に関する指導をしている」(●教職員100%)	B		家庭との連携が必要であり、各家庭に啓発できる機会を増やす。食育指導の場には積極的に参加・参観してもらう体制を整える。	
	安全教育の充実 ※不審者や自然災害の緊急時の対応(児童・保護者評価) 90%以上 ※危機管理意識を高めた安全指導(教職員評価)90%以上	※「不審者に会った時や地震・雷・火事の時にどうしたらよいか知っている」(●児童96%)「お子さんは、地震・火災・不審者に遭遇した時の対応を知っている」(●保護者92%) ※「危機管理意識を高め、子どもの安全について適切な指導をしている」(●教職員100%)	A		3学期の避難訓練の「ように考えて行動する機会を増やす。地域の安全マップの取組のように学校内の安全について学年を超えて考える場を持つ。	
地域とともにある学校 ◎地域と学校が一体となって子どもを育てる意識の醸成 ・地域の人と目標やビジョンを共有し、地域と一体となって子どもたちを育む ・子どもたちと地域の人がつながる教育活動の推進（学校地域連携カリキュラムの完遂） 園小中一貫教育の推進 ◎15歳の姿を見通した教育活動の創造 ◎「自立と共生」の力をもって生き抜く子どもの育成	学校教育目標の共有 ※めざす子ども像、学校像の共有(保護者評価) 90%以上 ※学校教育目標に向けた取組に心がける(教職員評価)90%以上	※「学校は、目指す学校、目指す子どもの姿を適切に伝えている」(●保護者96%) ※「目指す学級像、目指す子どもの姿を、保護者、地域と共有するように努めている」(●教職員100%)	A	A	学校統合に向けた学校教育の在り方について発信し、保護者や地域住民の思いを反映できる機会を生み出す。	○「えがお120」はとてもわかりやすく、どんな学校にしたいのか子どもたちにもわかり、各種のおたよりでもそのことが伝わるように工夫しているのがわかる。 ○学校支援ボランティアとの連絡にＳＮＳを使うシステムは南小の強みである。今後もその良さを継続できるよう、開校に向けて先導する立場としてかかってほしい。 ○3小や園小・小中の合同事業については、職員だけでなく、子どもたちがどう感じたかを大切に考え、その感想や成果、充実感、不安の解消など、児童の評価についての数値目標を設定する必要がある。
	地域との協働による教育活動の充実 ※地域住民を巻き込む教育活動を学期に１回以上 ※地域住民が入りやすい学校づくり(教職員評価)90%以上	※「地域との協働を意識し、地域協働を学期に１回は取り組んでいる」(●教職員100%) ※「南小学校は、地域住民が入りやすい学校になっている」(●教職員100%)	A		子どもたちの遊びの場として空き教室を開放し、そこへ地域住民がかかわれるような場へと移行させていく。	
	園小中一貫教育の推進 ※他校園との交流・参観を教職員各自が学期に１回以上かかわる ※中学校区での合同研究が充実(教職員評価)90%以上	※「マキノ地区の他校園との交流や参観を学期に１回は行っている」(●教職員100%) 「マキノ地区での学校を超えた合同研究が充実している」(●教職員100%)	A		これまでの関係を維持しながら、小学校の統合に向けてこども園も中学校の職員も一緒になって考え、新しい学校に向けてより関係を密にしていく。	
	小・中・こども園合同の事業の推進 ※小学校・中学校・こども園での合同事業が効果をあげている。(教職員評価)100%	※「マキノ地区の校園の合同事業が効果をあげている」(▲教職員75%)	C		新小学校開校を見据え、円滑なスタートができるよう、合同事業を通して各校のよさを集めて持続可能な活動を検証し、精査していく場を設ける。	

学校関係者評価	総評	評定	学校関係者評価を踏まえての改善点
	○創立150周年記念事業に児童のアイデアを生かし、児童主体のクイズラリーを取り入れたことは、地域住民・卒業生に向けた発信として有効だった。地域と学校がつながる良い機会となった。 ○職員数の減少をボランティアの協力によるサポートで補完する努力がある。ただし、子どもをたくましく育てるという面を考えると、おえて大人が出すぎない場面を設定する必要も感じる。たてわり遠足のように児童自ら企画する視点が大事で、与えられたことを楽しむだけでなく、自分たちで生み出したことを「面白がる」ことが人格形成には不可欠である。 ○マキノで育った子はマキノが好きな傾向がある。隔年で内容を変えるたてわり遠足でマキノの地域資源を生かしながら郷土の良さを感じることは有意義で、上学年のリーダー性を養える事業は、学校統合に向けてもこの視点を大切にできるよう南小がリーダーシップを発揮してほしい。 ○数値目標や指標が学校からの一方通行的なイメージがあるので関係者評価がやりづらい面がある。年度当初に指標・数値目標を知りたい。	B	○目先のことだけでなく長いスパンで子どもの将来を見据えて「たくましい子の育成に向けて、今何が必要か」の視点を大切に活動を展開していけるよう事業を計画していく。 ○令和10年の開校に向けて、ますます３つの小学校の結びつきを強めなければならないが、３校合同で実施する事業の意義を職員全体で再確認しながら進めて行きたい。 ○３小のカリキュラムを客観的に考え、何を新小学校に残していくのかを検証・精査を始める時期となる。「たくましい子を育てる」「ふるさとマキノを愛し続ける子を育てる」ことを念頭におき、学校のなかだけでなく、様々な機関や地域人材など、学校が持っていないものを積極的に活用する機会を生み出す。 ○年度当初の学校運営協議会において、学校評価における指標や数値目標を協議・確認することで、今までよりもそれらの視点を大切にしながら学校運営を行う職員の姿が生まれ、委員も学校運営に関わりやすくなる環境を整える。

４段階評定（A　目標を十分に達成　　B　ほぼ目標を達成　　C　やや不十分　　D　改善を要する）